



2014年3月12日放送

## 頻用処方解説 香蘇散

日本医科大学付属病院 東洋医学科 平馬 直樹

### 1. 主な効能

本日は香蘇散についてお話しします。香蘇散は本来季節を問わず温疫傷寒、すなわち感冒などの感染症に用いる処方です。風寒の邪を発散する効能を備えますが、胃腸の気のめぐりを調える働きもあることから、感染性胃腸炎、食中毒さらには感染症ではない脾胃の気の滞りの症候にも応用されます。

### 2. 処方の出典・処方の由来

香蘇散は宋代の『太平惠民和劑局方』の「傷寒門」に見られます（宋代：1107～10頃、陳師文らが撰述）。「四時の温疫傷寒を治す」という簡単な記載です。季節を問わず温疫傷寒の類の感染症を治療できるという内容です。香蘇散の名の由来は、構成生薬の香附子と紫蘇葉が処方の骨格となっているから命名されたのでしょう。

### 3. 構成生薬

その構成生薬ですが、香附子、紫蘇葉、陳皮、炙甘草の4味で、煎じて用いるときには生姜も加えます。

本方の主薬の紫蘇葉はシソ科のシソの葉ですが、辛温の薬性で肺、脾、胃に帰経します。風寒の邪を発散する散寒解表の作用があります。また、脾胃の気のめぐりを調える理気寛中の働きがあり、魚の刺身に添えられるように魚介類の食あたりを予防する効能もあります。

カヤツリグサ科のハマスゲの根茎の香附子は気のめぐりを促す理気薬ですが、辛苦平の

薬性でその辛味から発散の作用もあり、紫蘇葉を補助して風寒の邪を発散します。

ミカンの実の皮である陳皮は胃腸の気のめぐりを調える作用に優れます。辛苦温の薬性で、やはり発散の作用も備えています。

炙甘草は諸薬の働きを調える役割、生姜を加えると風寒の邪を発散する力が強まり、炙甘草と合わせて脾胃の働きを活発にすることも期待できます。合わせて風寒の邪を発表する作用がありますが、麻黄や桂皮のように強い発表の力ではなく穏やかな効果です。また、構成生薬のいずれも胃腸の働きを助け、脾胃の気のめぐりを調える効能があることから、感染症でなくても脾胃気滞の諸症状にひろく使われます。

#### 4. 古医書における記載

古医書における記載を見てみましょう。

この処方が日本でポピュラーになったのは、江戸前期の標準処方集の役割を果たした曲直瀬道三（1507-1594）の『医療衆方規矩』に収録され、しかもこの処方を活用するための薬味の加味の例を豊富に列挙しているためです。

その加味の例は「頭痛には川芎、白芷を加えて芎芷香蘇散と名付けもっぱら気鬱の頭痛を治す」とか、「咳嗽には桔梗、五味子を加える」、「嘔吐、悪心が止まないものには丁子、半夏を加える」、「臍の周りが痛むものには芍薬、肉桂を加える」など実際的で役に立つ記載が豊富に添えられています。

17世紀の北尾春甫（1659-1741）の『当荘庵家方口解』では、「カゼを引いて、薬をもちいるかどうかという程度の」軽い感冒に用いるものとしています。また、香蘇散は単独で用いる処方ではなく、加減したり、ほかの処方に合わせて用いるものだと述べています。岡本一抱（1654-1716）の『方意弁義』では、「香蘇散は四季ともに軽い傷寒の症や感冒、気の鬱滞に用いる」「婦人の気鬱の症によい。また、酒が過ぎて頭痛したり、なますの類を食べ過ぎて具合の悪いものによい」などの記載があり、軽い風邪のほか気鬱の症候や、頭痛、食あたりに応用することが書かれています。

18世紀の香月牛山（1656-1740）の『牛山方考』では、「香蘇散は気を散じ、気を快くし、鬱を散ずる剤で、耳鳴り、頭痛、眩暈や咳嗽、痰喘、腹痛などを治す」として、感染症よりも気をめぐらして諸症状を改善する理気剤としての使用を推奨しています。

#### 5. 現代における使い方

現代における使い方ですが、1973年出版の『漢方診療医典』（大塚敬節・矢数道明・清水藤太郎著；南山堂）では、「本方は発表の剤で感冒の軽症に用いる。葛根湯では強きに過ぎ、桂枝湯では胸に泥んで受け心が悪いというものによい。元来気の鬱滞を発散し、疎通する剤で、感冒に気の鬱滞を兼ねたものに最もよい。自覚症状は胸や心窩部がふさがり、ときに心下や腹が痛み、気分が優れず、動作がもの憂く、頭痛・頭重・耳鳴り・眩暈などを伴う。ふだん胃腸障害のある人の感冒に奏功する。感冒の軽症、胃腸型の流行性感

冒、魚肉の中毒、蕁麻疹、いわゆる血の道、月経閉止、月経困難症、神経衰弱、ヒステリーなどに応用される」としています。

札幌明和病院の井出雅弘は心療内科における香蘇散の臨床応用について述べ、心身症、抑うつ性疾患、不安障害などが、香蘇散の適応する気鬱の病証に類することを指摘して、抑うつ状態にある過敏性腸症候群に適用できること、また軽症うつ病やうつ状態の患者で感冒にかかりやすい人に、感冒の予防と気分障害の改善をかねて抗うつ剤と併用することを推奨しています。

金沢大学がん研究所の元雄は、漢方で咽中炙爛（いんちゅうしゃれん）あるいは梅核気といわれる咽喉頭異常感症に対して、寺澤の気鬱スコアで気鬱状態と診断された症例に香蘇散を投与して、90%の高い有効率を得ています。

## 6. 処方適用のポイント

次に処方適用のポイントですが、香蘇散の病邪を発散する作用は穏やかなので、感冒に用いる場合は、ちょっとかぜ気味で寒気がしてだるいなという程度の時に用いると、早く回復します。悪心、腹満などの胃腸症状を伴う感冒や、軽症の感染性胃腸炎にも適用できます。気のめぐりを促して胃腸を調える働きですので、ひどい嘔吐下痢には向きません。感染症以外の脾胃の気滞で悪心、腹満、食欲不振、みずおちが苦しい、消化不良などの胃腸症状に広く応用できます。

曲直瀬道三の多数の加味の例や、北尾春甫が加減したり、ほかの処方に合わせて用いる処方だと指摘しているように、香蘇散は基本処方であって、患者の症候に合わせて他の処方と合わせて用いるとより効果的です。胃腸症状に用いる場合は、六君子湯、平胃散などと合わせると胃腸の気のめぐりを調える働きが加わり六君子湯、平胃散の薬効の幅を広げます。

## 7. 類方鑑別

類似処方との鑑別ですが、感冒に用いる場合、桂枝湯、参蘇飲などと鑑別します。桂枝湯も胃腸を鼓舞しながら体を温めて風寒の邪を発散する処方ですが、体を温める力が香蘇散より勝っています。香蘇散は食欲不振、胃部膨満感などの脾胃気滞の症候を伴う者に用います。参蘇飲も紫蘇葉、陳皮が配合され風寒の邪を穏やかに発散しますが、人参、大棗が配合され気虚で体力低下した人の感冒に用います。香蘇散は気滞、参蘇飲は気虚を伴う感冒という違いです。

また、下痢や吐き気を伴う感染性胃腸炎に用いる場合、藿香正気散、五苓散、葛根黄連黄芩湯などが鑑別対象となります。藿香正気散は脾胃に湿が停留し、風寒の邪を感受した感染性胃腸炎の吐き下しに標準的に用いられます。五苓散は水を吐き、瀉下も水のように下るものです。葛根黄連黄芩湯は大腸湿熱の下痢に適応しますので、臭いの強い下痢便で肛門の灼熱感を伴います。これらの処方に比べると香蘇散の作用は穏やかで胃腸の気のめ

ぐりを調べ、吐き気や腹部膨満を解消します。ひどい嘔吐、下痢には力不足ですが、嘔吐、下痢が治まった後、胃腸を調えるのに使えます。

気鬱による心身症に用いる場合は半夏厚朴湯と鑑別します。半夏厚朴湯の証は気の滞りが強く、咽喉部、胸部、みずおちなどに強い閉塞感を生じています。香蘇散は何となくみずおちあたりが不快で、気分がすぐれない、咽に違和感があるというような状態に奏功します。

## 8. 症 例

最後に症例を紹介します。六君子湯と合わせた夏負けの予防の症例です。

46歳の女性で、もともと胃腸が弱く下痢しやすい。痩せている。毎年梅雨時になると食欲がなくなり、あっさりしたものしか咽を通らなくなり、元気もなくなる。秋までに体重も3kgくらい減少する。梅雨前の5月に夏負けを防ぎたくて来院。その時点では多く食べるとムカムカするので小食にしている。時々下痢するという症候。

脾気虚がこの人の体質素因で、胃腸に気の滞りと痰湿の停留があると診断しました。梅雨時になると気候の影響で体の中の痰湿も旺盛になるのでしょう。そこで、脾気を補い痰湿を排除する六君子湯に脾胃の気のめぐりを調べ、食欲を増す目的で香蘇散を合わせて投与しました。

すると梅雨時、夏場も食欲が落ちずに元気に乗り切り、秋口には例年とは違って体重が2kg増えたところまでいきました。梅雨から夏の食欲不振に六君子湯プラス香蘇散がよく効きます。以上香蘇散についてお話ししました。